(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名　　志田　泰盛

知（具体的な個々の認識・判断）の正しさ・妥当性（「真知性」）とは何か（真知［手段・根拠］の定義問題），知の真・偽の源泉（真偽発生問題）および真偽の検証方法（真偽検証問題）は何か。これらの論題(特に発生問題と検証問題)のもとに展開する議論は，一般に「真知論」(prāmāṇya-vāda)として括られ，インド哲学諸派の「知識論」(pramāṇa 論）の重要な一部をなしている。なかでも，真知性は知の本質をなし，特段の例外的状況がない限り，真知性は検証を待つことなく原則としてすべての知に保証されている ― と見なすミーマーンサー学派クマーリラ派の自律的真知論と，知の本質は真偽何れでもなく，中性的な知一般の発生源に優良要因が加わると真知が，瑕疵要因が加わると偽知が発生し，また個々の知の真偽確定には，行為目的の実現確認などによって改めて検証される必要がある ― と主張するニヤーヤ学派（N派）の他律的真知論との対立は，ヴェーダ聖典の権威論証という宗教問題も絡んで，クマーリラ（7世紀）の強固な理論構築以来，新ニヤーヤ派（14世紀のガンゲーシャから本格化）の時代以降にも及んで，長大な論争史を形成した。

クマーリラの自律的真知論に関しては，ここ20年程の間に注目すべき研究が日米の研究者によってなされているが，N派の他律的真知論については，幾つかの概説的紹介や部分的研究にとどまっていた。

こうした状況を踏まえて本論文（第Ⅰ部第1～5章，第Ⅱ部6～7章，第Ⅲ部補遺から成る）ではまず真知論研究全般に関する諸問題を概観した上で（第1章序論），ウダヤナ（11世紀）までのN派（「古典ニヤーヤ学派」）の他律説の展開を，現存する主要なテキスト資料（9世紀末のジャヤンタ，9－10世紀のヴァーチャスパティ，11世紀のウダヤナ）その他の綿密な解読（その成果が第Ⅱ部，第Ⅲ部の訳注研究として結実）にもとづいて，他律的発生理論（第2章）と他律的検証理論（第3章）の両面から，文献実証的な方法に比較思想的視点をまじえつつ解明し，N派真知論展開史上，注目すべき幾つかの新知見を提示したほか，現代哲学的関心事との接点を可能にする斬新な研究アプローチの端緒を開いた点も高く評価しうる。

また広義の真知論の一部をなす「真知手段・根拠の定義」に関しては，神の存在証明を企図した作品『論理の花束』(NKus)における，神の全知をも取り込んだウダヤナ独特の真知概念を検討し，絶対確実な理想的真偽検証方法に言及するなど彼の真知論の内実には，神学的色彩が濃厚な，その真知概念が大きく影響している可能性を示唆している（第4～5章)。

ついで第Ⅱ部ではNKusにおける真知論相当の箇所を，入手しえた8刊本と3写本の照合によるテキスト校訂を行った上で(第6章)，詳細な訳注を施し(第7章)，従来にはない高い信頼度をもったウダヤナ研究の基礎を築くことに成功した。このほか補遺に含まれた，ヴァーチャスパティの『ニヤーヤヴァールッティカ趣意解説』該当箇所の訳注研究も画期的である。

該当資料の綿密な解読作業など個々の重要な研究成果が，N派他律説の展開解明の文脈全体の中に，十分に有機的関連付けがなしえないまま箇条書き風にとどまっている点が見られることや，ウダヤナの真知論の特質とNKusの神学的議論との興味深い連関性は示唆されているものの，文献実証的な証明の段階には至っていないなどの点は，今後の課題として残されているが，上述した本研究の画期的な意義を決して損なうものではない。

以上の理由により，審査委員会は，本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。